

第2回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会 議事録

1. 日時 令和7年9月11日（木） 13時00分～15時00分
2. 場所 堺市博物館ホール
3. 出席 構成員6名
藪田貫構成員（座長）、和泉大樹構成員、大澤研一構成員、國賀由美子構成員、佐藤郁子構成員、稲葉信子構成員（web参加）
4. 傍聴者 10名
5. 会議次第
 - 開会
 - 議事 (1)基本理念の確認
(仮称)堺ミュージアム基本構想検討懇話会における主な発言と対応方針
(2)「取り組むべきこと」について
6. 議事等の内容
 - (1) 基本理念の確認
(事務局)「第1回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会主な意見と対応方針」説明
 - (2) 「取り組むべきこと」について
(事務局)「取り組むべきことと理念の整合」説明
(藪田)「取り組むべきこと」を中心に議論をし、理念も合わせて考えていく。

(大澤) 取り組むべきことの位置づけは、構想案の中で非常に重要な要素になると思う。新しい堺ミュージアムとして取り組むべきことでは、堺の特徴に紐付いた活動が大切であり、それがキャラクターコンテンツづくりにつながると考える。
日本全国や世界にアピールしていける堺の特徴は、古い段階からの海外交流であり、それに基づいて町が大きくなり、発展し、それが他の地域にもいろいろな影響を与えていたこと。国際交流と協力の活動をもう少し幅広く書き込んだら堺らしさがより強く出ると思う。

(事務局) 百舌鳥古墳群だけではなく、堺の町が発展してきた経過としての国際都市、貿易都市ということ、国内外に発信していく書きぶりをする必要があることはご意見の通り。

(和泉) 取り組むべきことの中に、「観光」という文言が出てきていないのはどうかと思う。また「学術的研究の推進」はもっと優先順位が高く、研究できる体制、組織をきちんと考えていかないといけない。世界遺産百舌鳥古墳群の価値理解について、百舌鳥・古市とはならないのか、これは単純に質問で、特に修正を求めているわけではない。

(事務局) 「観光」という言葉が直接出てこない点について、基本理念でも重要視している「観光」は、来館者レベルでとどまっており、周遊促進する施設という見出しも含めて検討していきたい。

「学術的研究の推進」の優先順位について、それに伴う体制・組織も、基本構想の中で示していければというご意見をいただいた。すべての博物館活動の根本には調査研究があり、それを土台に広げていくものと考えており、どういう順番で書くか検討させていただきたい。

(國賀) 「来館者に市内の歴史文化資源や環濠エリアへの周遊を促す施設とする」ことは、魅力的だと思うが、わかりにくい。また「博物館機能の充実により、市外他施設との差別化を図る」は具体的にどういうことか読み取りづらい。もう少し具体性を持たせてもらいたい。

「安全安心な施設設備」は、災害時文化財レスキューの中核となる施設は非常に大事だが、前回意見として揚げた「ヒトとモノに安全」は、例えばバリアフリーやユニバーサルミュージアムを整備するという文言で対応しているが、モノの安全は、ヒトとモノの動線をわけた施設、設備や収蔵庫のスペックなど博物館機能としての安全な、後世にモノを伝えるという意味での博物館のスペックの高さなどを具体的に述べていただけたらと思う。

(事務局) 「博物館機能の充実により、市外他施設の差別化を図る」の意味は、堺ミュージアムが堺へ来ていただく主目的となる施設として、他の博物館とは少し違う性格を持たせたいという思いで記したが、説明不足と思われ、堺ミュージアムの機能、特徴をもう少し強く打ち出す必要があると考える。

「安全安心な施設設備」では、ヒトとモノの安全は、ヒトのバリアフリーも含めて検討が必要ということも、基本理念2で書き込む方向であり、全体的なバリアフリーに取り組むべきことでどう記述していくかについて検討を進めたい。また、収蔵庫のスペック、動線など、博物館としてのスペックの高さを示してはどうかという意見については、今後施設、設備の検討で、収蔵庫や動線について検討をいただく際に、もう一つ違うレベルでの検討を通じてそのスペックを維持するような記述も必要かと感じた。

(佐藤) 「観光」の要素が見えなくなったのは、周遊を促進する施設の文章に「堺への来訪動機となる施設とすること」が抜けたためだと思う。堺に来る動機になることが、まさに観光客を誘客することなので、これが抜けて地域のためのローカルミュージアム的な要素が強まって、観光要素が見えにくくなったと思う。

堺の歴史・文化に関する普及と教育活用の項目の中で、「堺の歴史、文化等について多面的に学べ、思考を促す教育プログラムを提供する」とあるが、あらゆる人にとってという意味であれば、学ぶことはエンターテイメントでもあるので、「教育」という言葉を外し、観光客にとっても多面的に学べるプログラムが提供されるといいと思った。

「全ての人学び、楽しめる展示」で「文化財やミュージアム・コレクション等をわかりやすく展示」とあるが、わかりやすくだけでなく、次の興味を喚起することにより、他のエリアや今の産業につながる伝匠館や自転車博物館など次の周遊が促されるので、ただわかるだけではなく次の興味を誘発するところまで書き込んでいただけるといい。

(事務局) 基本理念では、新しい堺ミュージアム自体を見ることを目的に堺へ来てもらう、観光の目玉となる施設になるようにする書きぶりを検討したい。周遊を促進する施設という見出しも含めて、観光をどう強く押し出していか、取り組むべきことでもう一度検討したいと考える。

「教育プログラムの提供」については、あらゆる人々にとって意味あるプログラムの提供ということで、観光客、来訪者にとっても有益なプログラムと書き込むことを検討したい。「わかりやすい展示」については、ミュージアムだけでなく、観光とも強く結びつく、次への興味を促すような展示が表現できる内容を検討する必要があると感じた。

(稲葉) 取り組むべきことの10項目は、やりたいことをすべて書いていて、網羅的で、この内容について異論はない。ただ、堺の価値、百舌鳥・古市古墳群の価値をどう伝えるかという抽象的なことから、具体的な手段や技術的なことまでが混じって並んでいて、焦点が絞りきれていない印象を受ける。きちんと段階を追って、短期プログラムから中長期のプログラム、そして長期で目標とするものに並んでいた方がいいと思う。

「わかりやすい」という言葉で丸めると、誰にとって、どういうふうにわかりやすいのかがいつも課題になるので、気をつけて使わないといけな。

(事務局) 短期から長期を明確に分ける書きぶりで、取り組むべきことの方角性がわかりやすくなるように書く順番を再検討する必要がある。

「わかりやすい」という言葉は、受け取る人によって受け取り方が違うのではないかというご意見をいただき、注意をして使い方を検討したい。

(大澤) 「学術的研究の推進」に「堺、南大阪における歴史研究の拠点機能」とあるが、「南大阪」をどう想定するのか気になる。歴史を扱うとき今の行政エリアはあまり意味がないが、博物館として活動の基盤をどこに置くかは考えないといけない。「研究の拠点機能」とあるが、対象とする市民、利用者の範囲をどう考えるかは大きな課題。そういうことも含め、堺ミュージアムがどういうところを対象エリアとして考えていくか整理していく必要があり、それは、もっと上のレベルであらかじめ考えておかなければいけない。南大阪は、実は大阪でありあまり言わない言葉。

(事務局) 調査研究を進めるエリアとしては、泉州・南河内を含めた大和川以南のレベルを想定している。堺市域を中心に調査研究を進めるのは当然だが、関連する点として泉州地域、南河内地域を念頭に置いており、現在の学芸員の調査研究の対象として南大阪という用語を使った。観光客、来訪者などすべての方に興味を持っていただくには、地域を限定することで損なわれる部分もあると思われる、調査研究、見せるべき対象の想定を事務局ではっきりさせていく。

(大澤) 堺はこじんまりとした活動であってはいけないと思っている。堺は歴史、文化を積み重ねてきたエリアであり、それを世界の人たちと共有してほしい。と言いながら、実際の日々の活動はより具体的なものであり、そういう時にどういうところで、どういう活動を展開していくのか、しっかり根っこに持っておかないといけない。

(事務局) 国内外の情報発信を含め、調査研究、情報発信の内容、範囲についても、具体的な考えを持ちながら記述を検討していきたい。

(國賀) 「すべての人が学び、楽しめる展示」の「文化財やミュシャ・コレクション等をわかりやすく展示」は、いわゆる常設展示のことを指すと理解した。「展示」には、地域を理解するために常設展的な展示、もっと視野を広げて世界的に発信していく、あるいは観光客のためにも理解を得ていただくために他所からも借り、テーマにもとづいて行なう企画展あるいは特別展があると思う。「展示」という言葉を使う時は、目的も意識しながら企画展も視野に入れた方が良い。

(藪田) 稲葉構成員から、並列するのではなく段階的に考えてみたらどうかと意見があった。並列では数が増えていくので、段階的あるいは層で分けていく形で整理しておくことが大事だと思う。

「取り組むべきこと」は、前回の10項目が12項目になっているが、こういう事は少なければ少ないほどはっきりする。10以上に増やすのは、テクニカル的に問題があり、理念が6つであれば、やるべきことも6つぐらいに合わせていくべき。

堺ミュージアムは、堺にとって初めての博物館ではなく、大阪でも有数の歴史を誇る蓄積がある堺市博物館の第二弾として、リニューアルも含めてつくろうとしているわけで、堺市博物館が何を達成したのか、何を達成できなかったのかなどがはっきりしている前提で、この博物館が出

てくると思う。堺市博物館が何を達成したかについて、文章を読んだ時にわかるものでなく、まるで一からつくるみたいな形になるのは非常におかしい。そこの議論、内部間の協議が欠けていると思う。

もう一つ、兵庫県立歴史博物館は、姫路城が世界遺産になってからとなる前とは全く違う。世界遺産になって外的環境は変わったが、やるべきことは変わらない。やるべきことは、地域のこと、お城の整備のこと、お城の歴史のことである。堺は、古墳群が世界遺産になり、堺市博物館をつくった時とは全く状況が変わり、その要素が非常に大きくなったと思う。そのことを新しい次の博物館がどこまで担保するか、堺市として責任を負わなければならない。全部を博物館で担保する必要はないが、世界遺産になることによって、新たに博物館として何が求められるのか、それが堺市博物館の40年以上の歴史とどこで違うのかは、きちんと議論しておくべき。

同様にミュシャを持つことで、堺市博物館の状況から何がプラスされ、何が発信できるのか、人的にも研究資源的にも何を用意しなければならないのか、そういう新しい課題ができた。もう少し、堺の博物館の成り立ちと、今の置かれた状況との具体的な議論の切り結びをやってもらいたい。

(稲葉) 海外の方が、世界遺産、百舌鳥・古市古墳群を見に来られることから、インタープリテーションセンターは必要と考える。インタープリテーションセンターと堺市の歴史・文化の展示と資料の保管、またミュシャについて、それらを複合的に持っていき、その機能をどう両立させるかが、経営者側としての重要な議論になる。世界遺産である百舌鳥・古市古墳群のインタープリテーションセンターを地元は持つ必要があり、それが理念に入ることはいいと思う。具体的に、限られた面積で機能をどう分けていくのか、それが本当に融合できるのか、堺市の歴史、古墳を持つセンターとしての役割を、どうやって両立させていくのかという議論が、とても大事になってくる。

百舌鳥・古市古墳群、大仙公園には来訪者のための施設があり、そこで何をするのか、そこでのデマケーション（棲み分け）をどうするのが大事。取り組むべきことをたくさん並べているが、「新しい展示の工夫」、「新しい教育プログラムの工夫」、いわゆる観光といえる「新しい周遊のための工夫」、この3つに集約されると思う。デジタル化は全部に入ってくるし、プラスアルファで建設側として当然やるべきことである「環境に配慮した施設の建設」と、集約すれば4つ程度と思う。それが今12個あるのでわかりにくくなっている。例えばデジタル化や広報、周知は「新しい教育プログラム」に入り、わかりやすい展示や、世界遺産や古代文化にわたるすべての歴史も「新しい展示」に入ってくる。一番上の「連綿とつづく歴史・文化の保存と継承」と「世界遺産 百舌鳥古墳群の価値理解」は、取り組むべきことではなくて理念なので、ここには必要ないと思う。

(事務局) 取り組むべきことの項目の再整理を検討する。

(大澤) 堺の特質を振り返る中で、わかりきっているところも再確認することは必要と思う。また、この40年間の博物館の活動、現在の博物館の活動の見直し、実現できなかった部分、社会状況や時代の変化に伴い新しく生まれた課題、そういうものを整理して、関連性を示すことも、議論を活性化させる上では必要。こちらの博物館の展示を見て、特別展の展示室がないという苦労はよくわかる。現場の視点での課題、目の前の話もあれば、それだけにはとどまらないものもあると思われ、そういう中から、具体的に取り組むべきことへ反映させていけるものがあると思う。最終的にはコンセプト、基本理念、取り組むべきこと、とヒエラルキーをつくっていかなくてはならない。それぞれが関連性を持っており、どの内容をどこに入れるかを考えていくためにも、その根っこにある何をやるべきか、今抱えている課題を再確認し、再検討することが重要と思う。

(事務局) 基本構想素案のp5、6に、堺市の文化施設を取り巻く課題として、困っていることや実現できていないことを挙げ、検討の方向性を示しているが、数年間の堺市博物館の活動から見た包括的な課題の記述はできていなかった。本当に新しいミュージアムでしか実現できない取り組むべきこと、現代のミュージアムに求められる、取り組んでいかなければならないことの再整理は、大きな課題だと思う。

(藪田) このミュージアムではミュシャと世界遺産が一つになる、あるいはミュシャと環濠都市堺が一つになる、これは水と油のようなのかそれとも油同士なのか、どういう展望かを教えていただきたい。

(國賀) どういうストーリーをつくられるかということだと思う。今回示された基本理念及び取り組むべきことでは、今考えているストーリーがよく見えない。新しい博物館で何をめざすのか、何を一番に置くのかをもう少し検討した方が良いと思う。同時に公開することは可能であっても、一つのストーリーとしては結びつきにくいと思う。ヒストリックカーを常設で展示するとなると、開口部などの問題が起き、スペックの高い施設をつくれないうことになり難題となる。場合によっては、ヒストリックカーは、堺ミュージアムとは別の場所で展開する必要に迫られるかもしれない。そういう意味でもだいぶ検討が必要ではないか。

(事務局) 博物館とミュシャの展示が一緒というストーリーで基本構想を記述するには難儀しており、うまいストーリーを作成し、記述をブラッシュアップしたい。

(藪田) 教育プログラムと観光プログラムを、博物館の中でどう仕分けができるのか議論していただきたい。

(佐藤) 「教育」は先生がいて、指導や説明があり、それを理解、解釈するところまでが重要というイメージ。様々な美術館、博物館で行われているワークショップでは「どう感じますか」と投げかけた後、自由に観覧して戻って一緒に話をする、インタラクティブな価値の共創といったプログラムが行われている。「観光」イコール物見遊山ではないと思うので、曖昧なプログラムかもしれないが、十分興味を持ってもらえるものになると思う。

(稲葉) 市のレベルで観光を考えると、この博物館に必要なのは二次交通の確保。特に周遊をどうするか、他との連携をどうするかは重要。博物館機能を持つもの同士であれば両方の連携は可能であり、共通のプログラムの開発は可能と考える。ただ、二次交通については、その辺の仕分けまで行かないと次の段階に進まないと思われ、単体で行えるプログラムと、市の段階で行うべきプログラムを分けて考えてもらいたいと思う。

(和泉) 現状でさえ学芸員は研究の時間もあまりないというのに、新しい博物館で、世界遺産や環濠、ミュシャなどの色々なファクターと一緒にあって、本当にやっていけるのか。組織の問題について、一定の見通しのような議論が必要と考える。

(事務局) 現在、博物館、堺 アルフォンス・ミュシャ館、それぞれの施設の学芸員が調査研究、展示、活用を行っており、それが新しいミュージアムにどう統合されるのか、また相乗効果を生んでいかなければならないと考えている。現状の組織体制で実現できるかは大きな課題。調査研究が博物館活動の一番の根っこであり、その成果として充実した保存環境を守る、展示に生かしていく、講演会やワークショップで活用していく、それが実現できる組織体制を十分に検討していく必要があると認識している。

(大澤) 伊丹市立ミュージアムは、美術、近代・現代美術の施設と、歴史と近世文学、俳諧の施設を合体した一つのミュージアムとしてオープンしている。それぞれ個性を持ちながら、トータルとして賑わいをうまく創出していると感じる。具体の運営について詳しくわからないが、分野や専門が違い、全く別々に活動していた学芸員が、一つの屋根の下に入ったことで、協力しながら新しい価値を生み出していく活動にも積極的に取り組んでいる。そういう事例を具体的に調査されるといいと思う。

(事務局) 堺市博物館と堺 アルフォンス・ミュシャ館は、観覧者層は結構違う層だと認識している。ミュシャのファンの方には一緒に施設になることで堺の歴史に興味を持っていただく、また、博物館で堺の歴史に馴染んでいる方には、ミュシャの作品を見て美術作品にも興味を注いでもらう、そういう相乗効果はあると思う。そういう相乗効果をどうストーリー性で表せるかについて、記述のブラッシュアップを進めたい。

(和泉) 相乗効果は、顕著に意識していただきたい。今バラバラのものが一つになって、前の方が良かった、とならないような方向性の考えが必要。

(藪田) 堺市博物館や大阪市立博物館はどちらも「総合博物館」として始まっている。これまで博物館は「総合博物館」という形で、自然と歴史と美術、芸術が扱われるのがスタンダードだったが、ある時代から美術、歴史と特化する形となってきた。現在は、機能分化していく状況の方が多勢になったが、もともと博物館は全人的教育で、自然、歴史、生物と分けてはダメだという発想だった。これはおそらく世界で博物館が発生した時のコンセプトだと思われる。今回は美術と融合するが、今後は他の分野と一つの組織の中での共存でなく、どこかと連携する、あるいは協力関係を結び、自分のところでできない機能についてよその力を借りる博物館もあっていいのではないかと考える。博物館に求められる機能は多く、全部を1つの施設でやろうとすると大変だが、ここはするからそっちは助けてという形は、これからの博物館のような気がする。そういう発想がこの新博物館にはないのだろうか、今後は、そういった連携についても議論になると思う。
本日の懇話会を終わらせていただく。

(事務局) 次回の懇話会は11月13日木曜日の午後3時より、堺市役所本館3階大会議室で開催を予定している。第3回の議題は、(仮称)堺ミュージアムに求められる役割について、施設機能について、の2点である。